

京都造形芸術大学学長 尾池和夫

今日、京都造形芸術大学博士の称号を授与された芸術専攻（博士課程）5名の皆さん、京都造形芸術大学修士の学位を得られた、芸術文化研究専攻（修士課程）および芸術制作専攻（修士課程）、合計74名の皆さん、学士の学位を得られた芸術学部637名の皆さん、まことにおめでとうございます。ご列席の、ご来賓、学校法人瓜生山学園役員、副学長、研究科長、学部長、各専攻長、各学科長、センター長、教職員とともに、学位を受けられたことを、こころからお慶び申し上げます。

また、ご家族の皆さま、まことにおめでとうございます。

言うまでもなく博士の学位は、最上位の学位として位置づけられており、ヨーロッパやアメリカ合衆国、あるいは韓国などでは、名前に「博士」を付けて呼ぶ習慣があります。独り立ちしたその分野の最高の地点に立つ人として敬意を表されるのであり、自立して人生を歩いて行くことになります。

今の日本の学位制度の起源は、中世ヨーロッパの大学にありますが、日本の博士という呼び名の起源は、唐の制度にならった古代大学寮の博士（はかせ）制度にありました。学位制度には、ヨーロッパ系と中国系との2つがあるわけです。ヨーロッパ中世の大学では、ドクター、マスター、バチェラーの3つがありました。このうち、ドクターは大学の教師資格を証明する称号、マスターは親方あるいは主人という語から転じて、校長や教師という意味の称号でした。

日本の修士という称号は、第2次世界大戦後、1949年に新制大学院制度が導入され、大学院課程の初めの2年の履修を証明する学位として、アメリカの学位にならってマスターの学位が導入され、その訳語として修士という称号ができたものです。

修士の称号を得たみなさんは、2年の過程の中で、実作を体験し、物事を考え、設定した目標に向かって仕事する経験を積まれました。自らの力で得た学位であるという認識を持って社会に第一歩を踏み出す実感を今、しっかりと味わっておられることと思います。

学士の学位は、第1種教育職員免許状を取得するための基礎資格であり、専修学校高等課程教員資格、実務経験2年以上で専修学校専門課程教員資格が自動的に発生するという保障がある学位です。日本の大学における学士号の種類は、2012年時点で700種を超えています。

いずれにしても、皆さんの学位は、皆さんがこれからそれぞれの道を歩いていくために大切な、免許証となるものでありましょう。

先日の卒業展を見に来られた方は、瓜生山に1万2786名、高原学舎に605名でした。蒼山会の50名近い方も最終日に熱心にご覧になりました。うれしく思ったのは、今年は多くの作者が作品の前において、自分の制作の過程や思いを語ってくれたことでした。また指導の先生方も多くおられて、積極的に作品の佳さを教えて下さいました。

大学院や各学科の制作記録、論文集などが発行されていますが、とりわけ美術工芸学科では、

卒業展の開催に間に合うように、416ページに及ぶカタログを発行し、それを手にして卒業展を参観することができたということが注目されました。

さらによかったのは、さまざまの賞が多くの作品に与えられたということです。本当は、それらの賞も作品の横に目立つように示されている方が良かったと思い、来年は、賞の基準を定めて、もっと目立つようにそれを示す工夫をしてみたいと思いました。

思いつくままに卒業制作のいくつかを紹介してみたいと思います。

日本画コースの山影広野さんの作品『COSMOLOGY-princess』は、宇宙の時空間を超越して星雲を中心に丁寧に岩絵具を置いたものでした。

日本画コースの長谷川早由（さゆ）さんの作品『道中図』は、和紙を鞍馬山に持ち込んで墨で描いたもので、自然に畏敬の念に対する日本のこころを感じることでできる作品で、妙心寺退蔵院の松山大耕副住職に見せるようにと、思わずその場で、先生方をお願いしました。

大学院総合造形領域の廣田郁也さんの『transition game』は、綿布に染料を反応させた作品で、自己を知り、他者とつながる世界を、見るものに積極的に提供するような力を感じさせるものでした。

これらはいずれにしても、昨年本学に建立された『藝術立国之碑』にある徳山詳直理事長の言葉そのものであると私は感じました。

卒業式のある三月には、多くの黄色の花が咲きます。福寿草から始まって、水仙、タンポポ、ロウバイ、菜の花などが満開になります。まず咲くという意味のマンサクの黄色い花もあります。その黄色を特に好む、ミツバチなどが活発に活動します。黄色は感性を高める色ともいわれ、皆さんの巣立っていく卒業式を祝う色でもあると思います。皆さんが学習したように、鮮やかな黄色は脳を強く刺激する色でもあり、明るさや希望などのキーワードが黄色の特質でもあります。

四季折々の自然の変化に富む京都盆地で学習し、芸術活動の研鑽につとめた皆さんには、ぜひその日本列島独特の四季の変化を大切に感じる感覚を持ち続けてほしいと、私は願っています。

昨年、「藝術立国之碑」が、京都造形芸術大学と東北芸術工科大学に建立されました。その碑に刻まれている言葉の意味を深く考えることを、皆さんが卒業された後にも、重要なこととして記憶にとどめておいてほしいと思います。宇宙や地球や命あるものを思うところで、芸術を通して世界の平和を実現しようという精神を大切にしていきたいと思います。

卒業式に至るまで、皆さんは、作品の制作に、学習に、あるいは研究に励んでこられました。その上に、課外活動やボランティア活動、旅行、学友や先輩との議論、さまざまの楽しい学園生活を謳歌してこられたことと思います。またあるときには深く悩むこともあったかと思います。失敗もあり成功もあったことでしょう。いずれにしても、それらを超えて、今日の式典を迎えました。

京都造形芸術大学で学位を得た方は、現在までに、博士45名、修士684名、学士8546名になりました。その中で多くの方が、世界の各地ですでに活躍しています。これから進学する方もあり、あるいは社会に出て思い切り活躍する方もおられます。どうかくれぐれも健康を保って、元気に活躍して下さるよう祈っております。

この後で流れる学園歌『59段の架け橋』は、今年は本学の学生たちの声で収録したものです。大きな声で歌って下さい。

この学園から社会に巣立って行かれる皆さんには、この『59段の架け橋』を思い出して、たびたびこの学園を訪れてくださるようお願いいたします。この後で徳山理事長の歓送の言葉がありますが、皆さんは、それをよく記憶に留めて、藝術立国の理念への理解をさらに深め、それを後輩にも伝えてほしいと思います。皆さんが20年後、あるいは50年後にこの学園を訪れたとき、理事長も私もここにはいないと思いますが、藝術立国の理念はこの大学の学風としてしっかりと伝わっているはずです。その学風を確立して行くのは、何と言っても今日の式典に参列された皆さんの力です。

そのことを改めて強調して、私の式辞の締めくくりといたします。

博士、修士、学士の学位を得られた皆さん、まことにおめでとうございます。

ありがとうございました。